

2021年6月20日（日）「この世の原理を超えるもの」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 10:4-7

- 4 支配者があなたに憤っても、自分の場所を離れてはならない。冷静になれば、大きな罪には問われない。
- 5 太陽の下に不幸があるのを私は見た。それは権力ある者が引き起こす過ちで、
- 6 愚かな者が甚だしく高められ、富める者が低い地位に座している。
- 7 私は、奴隷が馬に乗り、高官が奴隷のように地を歩くのを見た。

《新改訳 2017》伝道者の書 10:4-7

- 4 支配者があなたに向かって立腹しても、あなたはその場を離れてはならない。冷静であれば、大きな罪は離れて行くから。
- 5 私は、日の下に一つの悪があるのを見た。それは、権力者から出る過失のようなもの。
- 6 愚か者が非常に高い位につけられ、富む者が低い席に座しているのを、
- 7 また、奴隷たちが馬に乗り、君主たちが奴隷のように地を歩くのを、私は見た。

#### 【序論】

かれこれ 10 年ほど前のことになりますが、ある人から面白い質問を投げかけられたことがあります。

部下にとって良い上司というのはどれだと思う？

- ①実力もないしやる気もない人
- ②実力はないけどやる気がある人
- ③実力はあるけどやる気がない人
- ④実力もあるしやる気もある人

この質問に対して私は④を選んだ記憶がありますが、その人の答えは意外でした。部下にとって一番良い上司というのは③だということです。①は論外、②は自分もできないことを部下に要求する、④は自分ができるから部下にも同じことを求める。③は理想を持ちつつも部下に仕事を任せることができる。一字一句正確に覚えているわけではありませんが、このようなニュアンスのことを言っていたと記憶しています。

その後、私は「普遍的なリーダーシップとは何か」ということを考え始め、一つの答えを持つようになりました。それは、自分が任されているコミュニティの成熟度に応じて、少しずつスタンスを変えていけることではないかと。つまり、そのコミュニティがまだ駆け出しの頃はリーダー自身が多くの仕事を担わなくてはなりません、周りが成

熟してきているならばだんだんと仕事を任せていく「信頼」が必要になるということです。これは、主イエスが弟子たちを教育し、天に昇り、今は御言葉と聖霊によって教会を導いておられるところに最もよく現れているでしょう。

## 【本論】

今日の箇所にも「支配者」と呼ばれる人が登場しますが、上に立つ人のあり方、そして彼／彼女に仕える人のあり方が教えられています。

### 本論 1. 支配者の怒りをなだめよ (4 節)

**支配者があなたに憤っても、自分の場所を離れてはならない。冷静になれば、大きな罪には問われない。(10:4)**

本書に度々出てくる「支配者」は、強い権力を握った人であり、気分次第で何でも決定できてしまうような、いわゆる「独裁者」です。彼に仕える臣下は、信頼されれば得るものが多いですが、嫌われたら危険に身を晒すことになります。ここで言われている「支配者が憤る」という状況は、臣下がせっかく良い提案や助言をしても王が気に入らず、むしろ曲解してカンカンに怒った時のことでしょう。コヘレトは、そのような危険な状況に陥ったとき、すぐにその場を離れてはいけないと忠告します。なぜなら、もし王が怒ったままの状態で去ったとしたら、彼に対する王の疑いは更に強まり、両者の関係は決裂し、最悪の事態を身に招くかもしれないからです。むしろ、臣下はその場を離れず、落ち着いて、従順な態度で、どうして自分はそう考えるのかを説明したほうがよいと。これは忍耐が必要ではありますが、話し合うことの大切さを教えてくれています。

私の恩師がよく言っていた言葉が思い出されました。「人間は別れ際が大事なんだよ。どのように別れたかで、その後再会できるかどうかが決まってくるから」。このことは、教会を含め、あらゆるコミュニティを離れる際に適用できる事柄でしょう。良い関係を残して去るということは、成熟した信仰者としての重要な側面であると思います。

### 本論 2. 支配者の過失がもたらす混乱 (5～7 節)

**太陽の下に不幸があるのを私は見た。それは権力ある者が引き起こす過ちで、愚かな者が甚だしく高められ、富める者が低い地位に座している。(10:5-6)**

「支配者の怒り」から「支配者の過失」へと話題が移ります。ここでは権力者の間違っ

た判断が社会にもたらす混乱について語られている。「過ち」(ἁμαρτία/シェガーガー)と訳された言葉の原意は「不注意による罪」であって、怠慢や失念によって生じる問題です。責任ある立場にある人のこのような間違いは、一般人が犯すよりもはるかに大きな影響を社会に及ぼします。

ただここでは、支配者の「うっかりミス」というレベルでは説明できないような混乱がもたらされています。「愚かな者が甚だしく高められ、富める者が低い地位に座している」という現実は何によって起きてくるのか。これは、支配者の好み、あるいはお金の力によって、人選がなされているような状況でしょう。真に能力のある者、心からそのコミュニティを愛している者が斥けられ、利権中心に物事が決まってしまう社会です。

列王記や歴代誌には様々な王が登場しますが、どのような王が統治するかによって、民の神に対する関係が著しく変わってくるのです。偶像礼拝を促進する王もいれば、偶像を一掃する王もいる。法的には権利のない者が親の好みによって次期王に選ばれていくこともあります。影響を受けるのは常に国民であって、王が悪いと民全体も悪くなっていく傾向がある。

「支配者」というと、遠い為政者ばかりを思い浮かべるかもしれませんが、「目上の人」「上司」「キャプテン」「親」などに置き換えてみるとグッと身近な話になるでしょう。誰もが「上に立つ人」を持っており、コミュニティをまとめている責任者が存在します。しかし、そのコミュニティの中で生きている人には現実が見えなくなっていることも多いのです。いつしか「おかしい状況」が当たり前になってしまう。

コヘレトが6節と7節で述べているのは、本来あるべき秩序とは真逆の状況であり、「愚かな者が甚だしく高められ、富める者が低い地位に座している」「奴隷が馬に乗り、高官が奴隷のように地を歩く」という歪んだ社会です。これは極端な言い方かもしれませんが、リーダーとしての責任感のない者、利権を貪る者、白を黒とする者が世を治めていることを述べていると言えましょう。

### 本論3. 突破口

残念なことですが、罪人が形成する社会ではこのような現実を避けることはできないのであり、何ともおかしいことがまかり通っているが、力のない者にはそれを動かしていくことがなかなかできません。コヘレトもまた、そのような現実を目の当たりにしながらため息をついていた者の一人なのでしょう。

しかしながら、この不条理には実は突破口があるのです。この世の原理とは真逆のベクトルを持つ「神の国の原理」です。それは、主イエスのように生きることであり、自

らへりくだって人に仕えるという道です。主イエスはこの世の制度に従いながら、何者にも支配されることはありませんでした。神の国の王として、すべての人に仕える者となられた。そして、ご自分のいのちにさえも執着なさらなかった。この世を憎むのではなく、どこまでも愛する者となられた。不正な裁判にかけられても弁明すらせず、十字架上でも誰をも恨まず、むしろ罪の赦しが与えられるようにと祈られた。この世を支配する憎しみの根っこを愛によって枯らされたのです。そして、この世との別れ際にも一切の恨みも争いも残されませんでした。

このような生き方は、誰がこの世で高められ低められるかという、コヘレトが敢えて問題視している現実とは、まったく次元の異なるところで進んでいきます。この世にあってこの世を超越している。神の国は火の玉の如くこの世界に飛び込んできた新しい価値観。主イエスと共に神の国の原理が動き始めたのです。キリスト者はその道を歩む者であり、自ら人に仕えることで、自分が低められたり正当な評価を受けられなかったりなどということにはもはや振り回される必要のない存在なのです。

#### 【結論】

コヘレトが抱えている問題の答えは新約にあります。コヘレトが見ている現実には事実でありながら、信仰を持つ者は世の不条理に支配されることがないのです。私たちが目指すところは、主イエスのようになることであり、怒りや憎しみに支配されることのない「愛の原理」に生きることです。そして、この神の国の支配を世にもたらしめていくことがキリスト者の使命であります。

#### 【祈り】

すべての人のしもべとなられた、イエス・キリストの父なる神様。この世においては不条理がまかり通り、ふさわしくない者が上に立てられることがあります。そして、それによって苦しむ国民がいます。個人の小さな力ではなかなか変えていくことのできない世界です。しかし、そのような世に主イエスは来てくださり、力によるのではなく、愛とへりくだりによってすべてを超えていく道を示してくださいました。私たちも様々なコミュニティに属する者ですが、どこにあって主イエスのように自ら仕える者となることができますように。そこから得られる神の国の平和を豊かに味わわせてください。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

この世を管理するため、「支配者」たる者を立てておられる、父なる神の愛、  
罪人に対して自ら仕え、神の国の原理をもたらし給うた、主イエス・キリストの恵み、  
主に倣う者とならせ、不条理な世に打ち勝たせ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。